「新しい年の新しい出発に向かって」

年頭聖書講筵　２０１９年１月１９日　新宿集会にて

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　奥田昌道

# 【見出し】

# ●聖書はあなた方にとって一体何なのか

聖書を、皆さんはどんなふうに読んでいらっしゃるか。聖書は、あなた方にとって一体何なのか。それをまた今年一年じっくり考えていただきたいと思うんです。

まだキリストを知らない時にこれから読む聖書と、キリストに救われて、いわゆるクリスチャンになった人間が読む聖書と、読み方が全く違うはずなんです。知らない時に読むときには、恐いんですね。

「審かれるのではないか、叱られるのではないか。地獄へ突き落とされるのではないか」

と。これはマタイ伝を見ましても、厳しいことがいっぱい出てくるでしょ。

「汝らの義、学者パリサイ人にらずば、……」

なんて、こんなものはクリスチャンになってからでも恐いような言葉です。そういう恐い言葉がいっぱい並んでいるような聖書に触れていく、そういう時代と、今度は完全に救われて天国人になった、そういう立場で聖書を見ていくのと、全く違うんですよね。皆さんは、さぁどっちでしょう？

「天国人になった」

という、ここにいらっしゃる方の大部分はもう天国人にされてしまっている。そしたら、

「あなたというのはこんなに素晴らしいんですよ」

ということを言ってくれているんですね、福音書も手紙も。あなたというものをつらつら、生まれた時から今に至るまで、そしてキリストに出会ってから今まで、そういうものを振り返ってみたら、

「こうだろ？」

「そうです、本当にその通りですよ、万才、万才！」

と、そういう読み方に変わっていかないといけないんですね。その読み方というのは実は、ヨハネの手紙に出てきている。お気づきになりますかしら、ヨハネの手紙です。

とにかく、聖書は読むのに、旧約聖書は大変ですから、旧約は限定的に部分的で結構です。ところが、新約聖書は──福音書それからパウロの手紙、ペテロの手紙、ヨハネの手紙──そういうものは本当に自分自身のことを書いてくれている。

「あなたというのはこうなんですよ。こんな素晴らしいものなんです、あなたは本当は気がついていないでしょう!?」

と。神さまの方からつかみかかって、

「あなたはこんな素晴らしい人間になっているんだから、そんなボヤボヤしている場合ではないですよ！」

と、そういう読み方に変わってくるんです。

# ●ヨハネ第一の手紙

それがヨハネの手紙に出てきてます。ヨハネ第一の手紙の第３章に、

「 1視よ、父の我らに賜いし愛のになるかを。我ら神の子と称えらる。既に神の子たり、

あなた方はみな神の子なんですよ。醜いアヒルの子ではない。もう神の子になっている。輝いていると。ここにちゃんと書いてある。世間が私たちを知らないのは、父なる神さまを知らないから、これはしょうがないだろうと。

世の我らを知らぬは、父を知らぬによりてなり。 2愛する者よ、我等いま神の子たり、

ああ、もう神の子か。では、これからどうなっていくんでしょうかと。

後いかん、未だ顕れず、

まだそれは顕れていない。

主の現れたもう時われら之にんことを知る。

「そっくりさんになる」と書いてある。それに似るようになると。あの栄光のキリストのお姿に我々は変貌するんです。ちゃんと――「私はどう思うか」とかではない――神さまの側からこうやって宣言しておられるんです。

「、御言」というけれども、御言は必ず成就する。ザカリヤ、エリサベツもそうでしたね、マリヤさんもそうでした。シメオン老人もそうですよ。みんな御言というものは必ずそれが成就する。ここでも、

我等いま神の子たり、後いかん、未だ顕れず、主の現れたもう時われら之にんことを知る。

主の現れたもう時、われらはそれのそっくりさんになると。「現れたもう時」というのは普通、「再臨の時」と言われていますけれども、私はそう思っていない。

「私がこの世を去って、すぐ主にお会いする。その主にお会いする時に、主の栄光の姿に我々は、私は変貌させていただく」

と。普通の人は、まぶしくてすぐに主にお会いできないですよ。でも、私たちは日頃から親しんでいるから、くないんです。日頃、地下にっている人間はいきなり太陽の輝いている所に行ったら、目がつぶれますよ。ところが、日頃から光の中にある者は、その光に会うと

「あっ、これが本ものの光か。ああうれしい。内なる光と天の光は本当に素晴らしい」

と、そういうふうになるはずなんです。非常に聖書に書いてあることは合理的です。

「不合理なるがゆえに我信ず」

とか何とか、誰か哲学者が言ってるのは、それはバカ者ですよ。不合理でも何でもない。神さまの理にかなっている。神さまの理と、この地上の理が違うだけなんです。それがヨハネ伝の３章のニコデモとの対話のところに出てきます。ニコデモは、土から生まれた人間というレベルで話している。ところが、キリストは、

「人は上から生まれなければ、人は新たに生まれずれば、神の国を見ることあたわず、神の国に入ることあらわず」

と、ちゃんと仰っている。そうでしょ。だから、キリストは、

「私が語った言葉は霊であり生命である。肉は役立たない」

と言う。「肉」というのは生まれながらの人間です。生まれながらの人間というのは、そのままだったら、また土に還るだけです。ところが、その土に還る前の百年間に天なるものを受けとったら、天の次元の人間に変貌するわけです。それが、キリストが我々に一番願っていらっしゃることでしょ。

「あなた方はもう世のものではない。私が世からあなた方を選びだした」

と、ちゃんとキリストはお別れのところで言っておられる。ヨハネ伝１４章から１６章まで、あれはキリストの遺言ですから。誰でも、これからお別れという時に大事なことを語るはずでしょ。１４章から１６章は、キリストが弟子たちに々と、

「自分が去ったあと、あなた方はどうなるのか」

ということを言っておられる。そういうふうにして、本当に聖書というのは、神さまがキリストを通して私たちに語りかけて、

「これでもか、これでもか。分かったか。本当に我をくらえ、我を飲め。私と一つになれ」

と言われたでしょ。そのぐらいに、聖書に親しんでほしいんです。いろんな本を読む必要はない。聖書そのものを、それも福音書、それからパウロ書簡、ペテロ書簡、ヨハネ書簡、これを渾然一体として受けとって、

「私自身が聖書である」

というぐらいになって欲しいんですよ、私の皆さんに対するお願い、抱負は。それだけのものを与えたいんです、神さまの側からは。

私は今朝もホテルでこちらに来る前に、ピリピ書を読んでいたんですけれども、ピリピ書を読んでいたら、もうグングン響いてきますね。

「ああ、パウロの思いは素晴らしい！」

と。私はかつてみんなに、、

「ピリピ書は京都キリスト召団に与えられた書だ」

と言った。わずか４章しかない。一気に読んでしまいます。何度も読んでいたら、大事なところだけ拾い読みできます。そのパウロの気持ちがもの凄く伝わってくる。

「聖書はどう言っているか」

ではなくて、

「私の思いが聖書に全部書いてある」

と、こういうふうになって欲しいんです。

「私の生き方、私はどんな人間かは全部、聖書に書いてある。私は口べたで、うまいこと言えんけど、私が神さまの目から見てどんな人間であるか、どうやって救われ、今どこへ向かっているか、どういう生き方をするか、それが全部、聖書にされている」

ということ。イエスは言われたでしょ、

「聖書は我につきてするものなり。それにもかかわらず、あなた方は旧約聖書の研究ばかりして、本ものである私が目の前にいるのに、私を退けている。モーセはそんなことはしなかったよ」

と、ちゃんと言っておられますよね。今度は私たちは、キリストのゆえに十字架・聖霊をいただいて、十字架を通って聖霊をいただいて、神の子にされている。

「我等いま神の子たり。その姿はこんなものだ」

ということが聖書で証言されている。だから、

「聖書は教えである。聖書によればどうだ。聖書は遠いところから自分を審く。聖書は我々を導いていく」

とか、そんな他人ごとではなくて、自分のことを書いてくれているということ。

「お前はこんなに素晴らしいんだ。あなたは素晴らしいんだよ」

という、そういうことを聖書は語ってくれている。それがこのヨハネのここです。

「 2愛する者よ、我等いま神の子たり、

もう既に神の子だと。では、これからどうなるのか。はい、主が顕れて下さる時に主のそっくりさんになりますよと。

後いかん、未だ顕れず、主の現れたもう時われら之にんことを知る。我らそののを見るべければなり。」(ヨハネ一3･2)

今はイエスさまを見てないですもの。どんなに頑張ったって、イエスを見ていない。けれども、その時には主を見る。そうしたら、主のそっくりさんに我々は変貌する。

# ●ペテロ前書

同じことは、ペテロの手紙にもある。こういうところを読んだら、すぐペテロの手紙を読みたくなる。ペテロ前書です。全部つながっていますよ、ペテロもヨハネもパウロもみな一緒なんですよ、大きな意味でね。ペテロ前書１章３節から、

「 3むべきかな、我らの主イエス・キリストの父なる神、そのなるにい、イエス・キリストの死人の中より甦えり給えることに由り、我らをに生れしめて生けるをかせ、

キリストの復活があるから、我々も復活できる。キリストは罪を全部片付けて下さって、そして一度は地獄に落ちて行かれた。それから、あの栄光の姿で顕れた。その時に、

「もうあなた方の罪なんて全部片付けたから心配はいらん。あなた方はもう今は胸を張っていいんだよ。神の子だよ」

と、そう言ってくれているんです。だから、

我らを新に生れしめて生けるをかせ、 4汝らの為に天に蓄えある、朽ちず汚れずまざるを継がしめ給えり。

天国を受けとるものにして下さった。

5汝らはのときに

「のとき」は「最後の審判」を指しているんでしょうけれども、我々は、この世を去ってキリストに出会う時に、

顕れんとてりたるを得んために、

まだ地上では仮の姿ですよ。パウロだって、

「いかにもしてキリストと同じ姿に変貌したい。それを求めて前に向かって進もう。後ろのものを忘れ、前に向かって体を延ばす」

とパウロも言ってましょ。

信仰によりて神の力に護らるるなり。

この地上では、我々は神の力、キリストの力、聖霊に守られて旅をやっている。当時は迫害もありましたから。ネロの迫害とか凄いでしょ、クリスチャンの殉教というのは。

6 この故に汝ら今しばしの程さまざまのによりて憂えざるを得ずとも、なおに喜べり。

試練がくればやっぱり憂いもありますよ。でも、それを乗り越えて、あなた方は大いに喜んでいるねと。クリスチャンが大いに喜んでいなかったらダメなんです。この世のことにかまけて、れていたらダメです。何が来ようと、それを突き抜けて、

「われ既に世に勝てり」

という在り方を現していかないとね。ちゃんとここに、

「あなた方はさまざまの試煉によりて憂えざるを得ず」

とある。今は迫害なんてないでしょ。病気とか、いろなんものがあるかもしれません、貧困とか、いろんな社会的なことがあっても、信仰による迫害なんて、皆さん、会ってないはずです。ありがたいことに、憲法で信教の自由が保証されているし。だから、いよいよ燃えていかないと申し訳ない。あなた方はなお喜んでいるねと。

7 汝らの信仰のは、つる金の火にためさるるよりも貴くして、

金よりも素晴らしいんだと。金は精錬されて純金になっていく。それより以上にあなた方はさまざまな試練によって鍛え上げられて輝いていくんだと。

イエス・キリストの現れ給うときと光栄ととを得べきなり。

と、ちゃんとここに書いてある。今はまだ醜いアヒルの子でも、やがて素晴らしい姿に変貌すると書いてあるでしょ。

8汝らイエスを見しことなけれど

そうです、私も見たことはない。でも、

之を愛し、今見ざれども之を信じて、言いがたく、かつ光栄あるをもて喜ぶ。

クリスチャンがこの姿でなければ、まだ本ものではない。

9 これ信仰の、すなわちの救を受くるにる。」(ペテロ前1･3～9)

ちゃんとここに、

「我々はこんな姿だ」

ということを証言してくれている。だから、聖書に書いてあることは他人ごとではない。自分のことを、自分はうまいこと表現できないけれども、聖書にみな書いてくれているんだと。だから、

「私という人間を本当に知りたければ、聖書を読んでね」

と、こういうふうに言えばいいんです、恋人に対しても（笑）。いやいや、老年でもいくらでも恋をしてくれたらいい、聖なる恋を。クリスチャンは、いろんな人をキリストに導くためには、聖書を通してつながっていけば、これは聖い交わりですからね、何十人恋人がいたって大丈夫ですから。

そんなことがペテロの手紙に出てくるし、このペテロの手紙で、

「あなた方は祭司である。素晴らしい」

と、いろいろペテロ前書に書いてくれています。それから、４章にきたら、

「 7 の物のおわり近づけり、然れば汝ら心をにし、みてせよ。 8何事よりも先ず互に熱く愛せよ。愛は多くの罪をえばなり。 9またむことなく互にろにせ。

云々と。我々にとって必要なことが全部書いてあるんですよ。それから、火の如き試練がやってきても、ビクともしないと言う。

12愛する者よ、汝らを試みんとてれる火のごときを異なる事として怪しまず、

「エライこっちゃ！」なんてあやしむな。「味わったことがない、エライこっちゃ！」なんて思うな。そういう苦難にあずかればあずかるほど喜べと。

13ってキリストのにれば、与るほど喜べ、なんじら彼の栄光の顕れん時にも喜び楽しまん為なり。 14もし汝等キリストの名のためにられなばなり。栄光の御霊すなわち神の御霊なんじらの上にり給えばなり。」（ペテロ前4･7～14）

本当にこういう生き方をなさって下されば――いろいろ身内のことだとか、老々介護だとかあるでしょう――でも、私はある意味で言いたい、

「人は自己責任である」

と。これを忘れては困るんです。

それは飛びますけれども、ガラテヤ書を見て下さい。人の人生というのは、自分で自分の人生に責任を持たなければいけない。そういうふうに教育しないといけない。

「人に頼るのではない。自分で自分の生涯の責任を持って生きなさい」

「病気はどうするの？」

「その時は祈りなさい」

と。とにかく、基本は、自分の人生は神さまから賜ったもので、自分で責任をもって歩んでいく。でも、早くからキリストにすがっていく人は幸せです。

「私は自分でやる」

といってやっている人が、ひとつ凄い壁にぶつかった時、なかなか立ち直れない。しかし、弱いようで、我々はキリストにすがっている人間は、何がきてもビクともしない。けれども、

「私は自分の力でやる」

とやっている人は、本当に大きな壁にぶつかって、倒産とか、その他、大災害があります、いろんなことがあります。津波や火事から命からがら逃れた。あとには何も残らない。絶望だと。しかし、クリスチャンは絶望しないですよ。

# ●ガラテヤ書

ガラテヤ書に、

「人はいた種を刈り取る」

とハッキリ書いてある。こういうものを我々はハッキリ告白していかないといけない。単なる同情ではない。人は播いた種を刈り取る。

「エライこっちゃ、自分は肉にばっかりまいてました」

と。でも、今からでも遅くない。

「さぁ、キリストにすがりましょう」

と。こういうふうに持っていかないとね。何でも

「ああ、よしよし」

ではない。

「まず自己責任だ」

ということをハッキリしてほしい、およそ普通の大人ならば。子どものときから、中学も高校も大学も、そういう面で自己責任をまずたたき込んで、それで、やれない人には助けを出す。ガラテヤ書６章７節に、

「 7自らくな、神はるべき者にあらず、

神を神とも思ってないやつがたくさんおるわけです、青年どもは。それに対してガラテヤ書は、

人のく所は、その刈る所とならん。

つまり、播いた種を刈り取るんだと。

8己が肉のために播く者は肉によりてを刈りとり、

多くの人は肉のために播いている。自己中心で己が欲望で「私、私、私」と。ところが、聖書は逆を言ってますね、キリストは。

「を棄て、が十字架を負いて我に従え。己が命を救わんと思うものはこれを失い、わがため福音のため己が命を棄ててかかる者は永遠の生命を得る」

と、ハッキリ言っておられます。ここでは、

「人の播く所は、その刈る所となる。肉のために、自己中心的に自分のために播く人は肉によりて滅亡を刈りとる」

という。

のために播く者は御霊によりてのを刈りとらん。」(ガラテヤ6･7～8)

とちゃんと書いてますよ。私はこれをハッキリ言っていきたい、宣言していきたい。「ああ、よしよし」ではない。まずこれなんです、原則は。それに照らしたら、

「ああ、私は肉に播いてきた。悪かった、どないしようか!?」

「キリストが助けて下さるよ。気付いたらいいんだよ。キリストはあなたのマイナスを全部背負って下さったんだ。何でキリストは十字架にかかったのか。あの方は祈っていれば、眩い姿になってすぐ天に昇ってしまうお方だよ。それがあの十字架の苦しみを味われたのは、その肉に播いていたものの罪、その結果、滅びをみな自分のものとして引き受けて下さったんだよ。えっ？　分かっているの？　あんた！」

と、こういう感じです。ガラテヤ書２章２０節、

「 20我キリストとに十字架につけられたり。われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり。21我は神のをしくせず、もし義とせらるることに由らば、キリストの死に給えるはなり。」(ガラテヤ2･20～21)

私はキリストの十字架をむだにしたくない。もし十字架以外で命が得られるのなら、キリストは無駄死にされたことになる。十字架でキリストは私のマイナスを、死をも滅ぼして下さった。だから、キリストの生命が来たら、死なない。肉体が滅びても私は永遠に生き続ける。天に昇ったら、今度は天使になって、また世の人を助けますよ。天に昇った人はみなそれをやっているはずです。天地一如なんです。聖書はそういうことをハッキリ宣言してくれている。

# ●ローマ書第８章

片一方は肉。「肉」は自己中心。「霊」は神中心。ローマ書は、８章のところで「霊と肉」ということを書いてます。肉に播く者は平安がない。神に逆らう。霊の生き方をする者は生命なり平安なりと。ローマ書８章、

「 1この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。 2キリスト・イエスに在るののは、なんじを罪と死との法よりしたればなり。

キリストに来ない人はみな、「罪と死の法」の中にがんじがらめにされている。それに気付いていないだけなんです。

3肉によりて弱くなれるの成しわぬ所を神はし給えり、

律法というのは人に努力を求めた。ところが、人間は努力、自分の力ではどうにもならなかった。それを思い知らせるために、律法は与えられた。律法ができなかった、モーセの律法ではどうにもならなかった、それを神さまはキリストを通してやって下さった。

即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のためにし、

生まれながらにキリストは私たちの罪を背負うために、この世に生まれて来られたようなお方です。シメオン老人がマリヤさんに言いましたね。

肉に於て罪を定めたまえり。

このお方において、キリストの御体において罪を定めたもうた。これはコリント書にも出てきます。罪なき方を罪としたもうた。これによって我々は救われたと。

4これ肉に従わず霊に従いて歩む我らのに、の義のうせられん為なり。

本来、モーセの律法を通してねらっていたことが、律法ではどうにもならなかった。しかし、本当の律法の求めているところをキリストは成就された。キリストは律法の中に生まれていながら、律法を乗り越えた。律法は神の御意の表れなんですよ。それを己が力でやると、ダメなんです。キリストは神さまに委ねきっていますから、神さまから出てくる律法のを本当に受けとって、それを生き抜かれた。

4これ肉に従わず霊に従いて歩む我らの中に、律法の義の完うせられん為なり。

と。聖書はどこを読んでも、全部つながっていますから。小池先生は、

「聖書は楽しくてしょうがない」

と、よく言われましたね。

「聖書は驚嘆驚倒して読むべき書なり」

とも言われました。聖書と小池先生は一つになっている。私もなんかそういう境地に今なってきたんです。

「ああ、聖書は私の思いを代弁してくれているなぁ」

と。初めは、

「聖書に習わなくてはならない。聖書の求めているところに行かないといかん」

と思った。今は、

「あっ、私の言いたいことが全部書いてあるではないか」

と。本当に皆さん、そうなって欲しいんですよ。

即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のためにし、肉に於て罪を定めたまえり。

キリストを罪ある肉の形で、我々の罪のために遣わして、そのキリストの肉において、罪を定めて下さった。

4これ肉に従わず霊に従いて歩む我らの中に、

御霊に導かれたらもう律法を乗り越えていくんです。律法が本来ねらっていたところを、御霊は実現して下さる。

律法の義のうせられん為なり。

律法が本来ねらっているところを、キリストが我々のマイナスを全部背負って下さって、御霊を送って下さると、今度は楽々と律法を乗り越えて、本当に神の御意にかなう生き方に変えられる、天国人にされてしまう。

律法の世界はまだ地上の人なんですよ。地上の人で、自分が肉の姿でいくら律法を全うしようとしても無理なんです。しかし、変貌したら、もう楽々と律法を超えてしまっている。それは御霊の世界なんです。そういうことがここに書いてある。

5肉にしたがう者は肉の事をおもい、霊にしたがう者は霊の事をおもう。

我々はキリストによって本当に変貌するまでは、肉の人なんです。キリストによって変貌してしまえば、霊の人なんです。肉に従う間は肉のことを思っている。霊、キリストの霊に従う者は霊のことを思う。

これはニコデモさんとキリストの対話で全然、次元が違いましたね。

「そんなことがあるんですか？」

なんて、ニコデモは言っている。

「風は思いのままに吹くではないか」

とキリストは言われた。ヨハネ伝では、

「人の子は挙げられなくてはならない」

「神はそのを賜ったほどに世を愛して下さった」

と、これはつながっているでしょ。ここにも、

6肉のは死なり、霊の念はなり、平安なり。

「生命なり、平安なり」なんですよ、本当に。

「平安、汝にあれ」

という。皆さんはいろんなご苦労をなさっている。老々介護とかなさっている。でも、キリストは、

「汝ら、世にありてはあり。されど雄々しかれ、我既に世に勝てり」

と、常にキリストは勝利宣言して下さっている。何がきても、ヘコたれない。パウロもそうでした。あのパウロの大変な苦難を突き抜けて、凱歌をあげているでしょ。そういう境地に本当に皆さん、入っていただきたい。聖書を向こうで見ているのではない。もう自分がその中に入ってしまって、

「あ、私のことをここまで言ってくれている。これは凄いわ」

と、そういう読み方です。ここにも、

5肉にしたがう者は肉の事をおもい、霊にしたがう者は霊の事をおもう。 6 肉のは死なり、

ああそうでしたと。

霊の念は生命なり、平安なり。

だから、新しく生まれないといけない。新しく生まれるために、キリストは十字架を背負ってくれた。そして、ご自分が我々のマイナスを全部引きとって、キリストの復活の生命、神に従う生命、御霊の生命、これを下さった。それで、新しく生まれたら、これは神の子ですから、神の子は神の御思いと一つになっていけるわけでしょ。だから、

7肉の念は神に逆う、それは神の律法にわず、否したがうことわず、

従うことができないんだと。

8また肉に居る者は神を悦ばすこと能わざるなり。

即ち、肉に居る者は神を悦ばすことは不可能だと。

9然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居らん

「しかし、神の御霊があなた方の中に宿っている以上は、あなた方はもう肉の人ではない、霊の人だよ」

と。ちゃんと書いてある。「霊と肉」というのはヨハネ伝の専売特許ではない。ここにちゃんとパウロも、

「あなた方は、御霊が宿って下さっていれば、あなた方はもう肉の人ではない、霊の人なんだ」

と。そして、

キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。

「キリストの御霊なき者はクリスチャンではない」

と畳みかけている。「御霊なきクリスチャン」というのは自己矛盾です。人形なんですよね。御霊があって初めてクリスチャンなんです。

「キリスト者とは何ですか？」

「はい、御霊をいただいた者です。旧き我は死んで、御霊をいただいて生きている人間、天国人です」

と。自己紹介の時に、

「はい、私は天国人です」

と言う。人は、

「えっ!?」

と驚く。そうでしょ。

「私はもう死にました。旧い私は死にました、

『われ主と共に十字架せられたり。もはや我生くるにあらず。キリストわがうちに在りて、生き給うなり』

ということですよ」

と。これを自己紹介の時にやって下さい、皆さん。人は驚きますよ。

「然れど神の御霊があなた方の中に宿り給う以上、あなた方はもう霊の人だ。キリストの御霊がなかったらキリスト者ではないよ」

と。御霊のキリストがあなた方の中にいらっしゃれば──体はどうせ死にますよ、この体は──でも、霊はもう永遠の生命の中に生きている。

それは死なないで変貌して、いきなり天へ昇っていったら、凄いんです。パウロは「そうなりたい」と言っているけれども、エノクとかエリヤとか、そのくらいですよ、肉の体が変貌して天に昇って逝ったのは。他の人は小池先生だって誰だってみんなやっぱり、

「われ土の器に宝をてり」

でしょ。だから、土は土に還る。けれども、土の器でありながら、中に宝を有てりと。パウロは、「土の器に宝を有てり」と言っている。その御霊の生命という宝を持っている。これが私の霊と一体になって、私の霊を包み込んで、そしてこの世を去る時には、スーッと向こうへ連れて行ってくれる。それを持っていない人は亡霊ですよ、お墓でっているかもしれない。だから、小池先生は言われましたよ、

「小さい子をお墓に連れて行ってはいかん。さ迷っている霊がくっつくから。そうすると、病気になる」

と。それは本当だと思いますね。浮かばれない霊がいっぱいおるんだって、お墓には。こっちはクリスチャンで御霊がきていたら、

「あなた気の毒ね、お祈りしてあげるから、一緒にキリストへ行こう」

というくらいのゆとりをいただけるけれども、中途半端な段階であまりお墓に夜なんか行ったら危ないです、それは変なものがくっついたら。

霊界というのは、我々は見えないだけで、たえず入り乱れているんです。電波は、皆さん見えないでしょ。もの凄く電波が飛び交っている。携帯を持ってみんなやっている。あれはようぶつからんなと思う。それと同じように、霊界というのはもう我々の中に充満しているんですよ。だから、チャンネルを合わせたらパァーッとそっちへいく。だから、サタンの霊にチャンネルを合わせたらエライこっちゃ。そういうことですよね。

10しキリスト汝らにさば、は罪によりて死にたる者なれど、霊は義によりてに在らん。 11 若しイエスを死人の中よりえらせ給いし者のなんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御霊によりて、汝らの死ぬべき体をもかし給わん。

体は罪で死んだけれども、霊は義によりて生命にある。そして、キリストを甦らせて下さったあのお方の御霊が、神の霊が我々の中に宿って下さるならば、そのキリストを復活させて下さった神さまは、あなた方の中に宿っておられる御霊によって、汝らの死ぬべき体をも活かし給う、とちゃんと書いてある。キリストは、

「我はなりなり。我を信ずる者は死すとも生きん。およそ生きて我を信ずる者はに死なざるべし」

と、マルタとマリヤに仰った。そのことをちゃんとパウロもここで言ってくれている。

12されば兄弟よ、われらはあれど、肉に負う者ならねば、肉に従いて活くべきにあらず。

さっきのガラテヤ書で、「肉に播く者は肉から滅びを刈り取る」とちゃんと書いてある。

13汝等もし肉に従いて活きなば、死なん。

「肉に従いて活きなば死ぬ」とちゃんとここに書いてある。死ぬべしと。

もし霊によりてのを殺さば活くべし。

「体」というのは自己中心ですから、欲望を持っていますから、そいつに任せっぱなしにしたら、クリスチャンといえども危ない。やっぱりそこはコントロールしていかないとダメだ。だから、霊によって体の行いを殺すならば活きると。

14すべて神の御霊に導かるる者は、これ神の子なり。

と。神の子宣言をしてくれているんです。ヨハネだけではないですよ。

15汝らは再びをくためにたる霊を受けしにあらず、子とせられたる者の霊を受けたり、之によりて我らはアバ父と呼ぶなり。

子たる身分を授かった。子としての霊を受けた。子としてなら、「お父ちゃん！」と呼ぶんです。

16御霊みずから我らの霊とともに我らが神の子たることをす。 17もし子たらばたらん、神のにしてキリストと共に世嗣たるなり。これはキリストとともに栄光を受けん為に、そのをも共に受くるに因る。」(ロマ8･1～17)

私たちが神の子であることをちゃんと御霊ご自身が証明して下さる。子どもだったら、天国を受け継ぐ、キリストと一緒に共同相続人だと。

「これはキリストと共に栄光を受けん為に、その苦難をも共に受くるに因る」

と。キリストと苦しみを共にすることを嫌がったらダメなんです。ここにちゃんと書いてあるでしょ。

# ●生き方のモデルとしてのピリピ書

ピリピ書をちょっと見て下さい。私は我々の生き方のモデルとしてピリピ書を推薦したい。ピリピ書に従っていけば間違いない。毎日でも読んでいただきたいような書簡です。その中の大事なところだけをマークして、それを拾い読みしたらいい。

まず１章２０節、パウロは今、がれている身、囚人なんです。ところが、にもかかわらず、パウロはどんなことを言っているか。

「 20これは我が何事をも恥じずして、今も常のごとく

囚われの身であっても自由な身である時と変わらないよと。

かもすることなく、生くるにも、死ぬるにも、我が身によりてキリストのめられ給わんことを切に願い、また望むところにえるなり。 21我にとりて、生くるはキリストなり、死ぬるもまた益なり。」(ピリピ1･20～21)

これですよ、我々の生き方は。

「生くるにも、死ぬるにも、この身によりてキリストのめられ給うように」

というキリスト中心の生き方。自分の欲望を満たすとか、

「自分はこういう野心を持っているからこれをやらしてくれ」

とか、そういうのが表に出るのではなく、まず、

「キリストの御名の栄光の現れんために」

ということです。

「では、あなたはこの仕事をやってごらん。応援するから」

「はい、やります！」

と。そうしたら、

「栄光神に」

と、こうなる。そうではなくて自分の欲望を満たすために、

「神さま、助けてね」

と、これは逆ですよ。それは神さまを自分の子分にしているわけだ。この世の人は大体そうでしょ。お宮参りするのは全部自分の欲望を満たしてくれるため。勉強のためならの所へ行く、お産のためなら出雲大社へ行くとか。みな分業でしょ、日本の神さまは。全部、自分のこの世の欲望を満たすためにお参りしている。我々は違うんです。我々は、

「生くるはキリスト、死ぬるも益なり。この身においてキリストのめられ給わんことを」

というのが我々の願いなんです。まるでこの世の人と逆なんです。それをハッキリしてほしい。

「あなたは何を目指して生きているんですか？」

「はい、この身を通して、キリストの、神の御意が成るように。御名が崇められんために」

と。「主の祈り」がそうでしょ。

「がめられんことを」

という。

「の天に成る如く地にも、この身を通して現して下さい」

と。みな神中心の生き方をしてますね、主の祈りも。ここも、

「かも臆することなく、生くるにも、死ぬるにも、我が身によりてキリストの崇められ給わんことを切に願い、また望むところにえるなり。 21 我にとりて、生くるはキリストなり、死ぬるもまた益なり。」（ピリピ1･20～21）

と。こういう突き抜けた姿、これを証明してほしいんです。

お正月からのいろんな番組を見ても、こんなことを言うているのは全然ありませんわ。この世のことばっかりですよ。しょうがないね、テレビなんか。でも、我々は、

「もう既に死にたるものにして、あなた方の生命はキリストと共に神の中に隠されてあればなり」（コロサイ3･3）

と。これはコロサイ書３章です。ピリピ、エペソ、コロサイのこの三つは一つのまとまりなんです。共通性があります。エペソ書は一番整っていますけれども。

# ●コロサイ書

コロサイ書３章、

「 1汝等もしキリストと共に甦えらせられしならば、上にあるものを求めよ、

あなた方はもうキリストと一緒に甦えらされた。

「あなたは死んでいるのではない、死にっぱなしではない。キリストと一緒にもう甦えったんだよ」

と言っている。「もし」と書いてあるけれども、これは「である以上は」ということ。

「あなた方はもう既にキリストと一緒に甦えらされた存在なんだ。だったら、この世のことを求めるのではない。天のものを求めるのは当たり前でしょ、天国人なんだから」

と。天国人ならば天国のことを求めていく。肉ではない。霊なるものを求めていく。そういうことですね。

キリストに在りて神の右に坐し給うなり。 2汝ら上にあるものをい、地に在るものを念うな、

とちゃんと書いてある。

3汝らは死にたる者にして、其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。

これが我々の本当の姿だよという。

4我らの生命なるキリストの現れ給うとき、汝らも之とともに栄光のうちに現れん。

キリストが現れて下さる時、あなた方も栄光のうちに、キリストのそっくりさんみたいな栄光の姿で現れてくる。こういう大希望を与えられて、もうあなた方は醜いアヒルの子ではないんだ、素晴らしい白鳥の子だ。だったら、この地上のつまらんことに、もうかかずらあうなと。そんなものは捨てて、神の子らしく生きようではないか、と励ましている。

5されば地にある、すなわち淫行・・情慾・悪慾・またを殺せ、慳貪は偶像崇拝なり。 6神のは、これらの事によりて不従順の子らにるなり。 7汝らもかかる人の中に日を送りし時は、これらのしき事に歩めり。

あなた方もかつてはそういう時を送っていたよねと、ちゃんとみな書いてあるんですよ。あなた方もキリストに救われる前はそうだったと。しかし、もう今は、

8されど今は凡て此等のこと及び怒・・悪意を棄て、

これは全部、肉の姿ですね、そういうものは棄てて、

と恥ずべきとを汝らの口より棄てよ。 9互にをいうな、汝らは既にき人とそのとを脱ぎて、 10新しき人をたればなり。

新しい人を着たんだよと。成人式でみな新しい着物を着てますね。成人式ではないけれども、キリスト式です。キリスト式をやってもらって──「旧い上衣よさようなら」と、あの「青い山脈」にありましたね──ちゃんとあなた方は、旧き人とその行為とを脱ぎて、

10新しき人をたればなり。この新しき人は、これを造り給いしもののにい、

これはキリストですよ、キリストにならうように、

いよいよ新になりて知識に至るなり。

ここで言っている「知識」というのは「奥義」「ミステリオン」という神秘へつながっていくんだと。もうそうなると、

11かくてギリシヤ人とユダヤ人、割礼と無割礼、あるいは、スクテヤ人・奴隷・自主のある事なし、

そんな区別はないと。

それキリストはの物なり、万のものの中にあり。

我々はこういう姿だよと。「だから」と続いてくる。

12この故に汝らは神の選民にして聖なる者また愛せらるる者なれば、慈悲の心・・謙遜・柔和・寛容をよ。

あなた方は神に選ばれた民で、聖なる者また神さまに愛されている者だったら、慈悲の心・仁慈・謙遜・柔和・寛容は当然、身につくよねと。

13また互に忍びあい、若し人に責むべき事あらばにせ、主の汝らを恕し給える如く汝らもすべし。 14凡て此等のものの上に愛を加えよ、愛は徳をうする帯なり。 15キリストの平和をして汝らの心をどらしめよ、汝らの召されて一体となりたるはこれが為なり、汝ら感謝の心をけ。 16キリストのをしてに汝らのに住ましめ、凡ての知慧によりて、詩と讃美と霊の歌とをもて、互に教え互に訓戒し、に感じて心のうちに神を讃美せよ。 17またす所の凡ての事、あるいはあるいは、みな主イエスの名にりて為し、彼によりて父なる神に感謝せよ。」(コロサイ3･1～17)

と。全部、我々の必要なことを書いてくれているんですよ。

それから、４章へとびますけれども、コロサイ書４章は、

「自分のためにも祈ってほしい」

ということを言っている。パウロなんかは、放っておいても大丈夫かと。そうではない。パウロは「祈ってほしい、祈ってほしい」といつも言ってますよ、信者たちに。

「 2汝ら感謝しつつ目を覚して祈を常にせよ。 3また我らの為にも祈りて、神の我らにを伝うる門をひらき、我等をしてキリストの奧義を語らしめ

我々は伝道の使命があります。私は京都でも言ったんです、

「今年の共通の課題にしたいことは、一年に一人をクリスチャンにする。一年に一人にキリストを伝えること」

と。「一年に一人を」というのは、キリストの方に向きかかっている人をキリストへ本もののクリスチャンにする。何も「自分の集会に来てくれ」とかでなくていい。いい教会があれば行きなさい。とにかく、

「あなたは本もののクリスチャンになってほしい。もうこっちに向いているのだから」

と。一年に一人を本当のクリスチャンになっていただくように努力する。それから、まだ全然キリストを知らない方に、さ迷っている人にキリストを伝える。一年に一人に。だから、

「一年に一人を、一年に一人に」

これをみんながやったら、一年で倍になるわけです。そうでしょ。

これは小池先生が言われたんです。まだ私が若い頃でしたよ。僕はその時に、

「へぇ？　先生、たった一人でいいんですか、少なすぎるではありませんか？」

と。それが僕の正直な反応だった。僕はその頃、本当にトラクト〔tract、宗教・政治を普及させるために使う小冊子やパンフレット〕を持って、電車に乗っても配るとか――宣教師の所にしばらく居ましたから、宣教師はそんなことをいつも言うんですよ――だから正直に、病院に行って待合室で配るとか、そんなことをやっていたけれども。

そんなことを別にやらなくても、小池先生は電車に乗って、新幹線で女の子が横に坐っていたら、まずチョコレートとかミカンを渡して、それから福音の話をする。あれは女の子だからなさるので、他のオッサンだったらしないよ、小池先生は（笑）。私の推定であります、証拠はありません。まぁ余計なことを言いました。

パウロも、

3 また我らの為にも祈りて、神の我らに御言を伝うる門をひらき、我等をしてキリストの奧義を語らしめ

私たちを通してキリストの奥義を語らせてほしいんだと。聞く耳を持たんやつがいっぱいおるから。まず聞く耳を持たせてほしい。そして、伝えたいんだと言っている。

4 之を我が語るべき如く顕させ給わんことを願え、我はこの奧義のためにがれたり。 5なんじらをうかがい、外の人に対し知慧をもて行え。 6汝らの言は常に恵を用い、塩にて味つけよ。然らば如何にしてに答うべきかを知らん。」(コロサイ4･2～6)

「釈迦に説法」ということか何かしりません、「豚に真珠」でも困ります。やっぱり、

「この人には伝えたい、この人は救われてほしい」

という、そういう願いを持たせていただいて、もし長い関係が続くならね。電車の行きずりの人ならしょうがないけれども、それなりの人なら、何か相談を受けるとか、何か機会があったら、それをつかまえて、

「何とかどうぞ、この人をあなたのところへ。この人はいろんなことで今、悩んでいる。あなたのことは全然頭にありません。でも、この人を本当に救って下さるのはあなたしかありません。だからどうぞ、御言を私は伝えたい。そのためには、彼の心を耕して下さい」

と。善き地に落ちないと、実を結ばないでしょ。石地に落ちた種は枯れてしまいますね。

「だからどうぞ、あの人の心を耕して下さい。私は御言を播きたいんです」

と。そういう願いをもってやることが大事なんです。

その願いを持つことが大事なことがピリピ書に出てくる。ピリピ書２章１３節に、

「 13神はを成さんために汝らのにはたらき、汝等をしてをたて、を行わしめ給えばなり。

我々が志をたてないと、神さまは働こうと思っても働けないんですよ。まず私たちは志をたてる。「一年の計は元旦にある」といいます。それで、皆さんに「今年の抱負は？」と聞いたんです。

「まず一年にキリストのために、神の国のために私はこれをさせていただきたい」

と。そしたらここに、

をたて、を行わしめ給えばなり

と。そして、

14なんじらかず疑わずして、ての事をおこなえ。

「呟き、疑い」これはマイナス要因ですから。

15是なんじら責むべき所なく素直にして、此の曲れるなる時代に在りて神のなき子とならん為なり。汝らは生命の言を保ちて、世の光のごとく此の時代に輝く。」(ピリピ2･13～15)

あなた方は生命の言葉を保ちて、世の光としてこの時代に輝いていると。

「汝らは世の光なり」

と言われた。キリストという光がうちに宿ると、あなた方自身が光になる。キリストはもう今、世にいらっしゃらないから、我々がキリストの代わりにこの世に送り出されているわけです。

それから少し飛びまして２１節、これがこの世の人の姿、へたしたらクリスチャンもこういう姿の人が多いかもしれません。

「 21人は皆イエス・キリストの事を求めず、唯おのれの事のみを求む。

それに比べればテモテは素晴らしいと、テモテを褒めている。パウロはテモテを非常に大事にしました。

22されどテモテの錬達なるは汝らの知る所なり、即ち子の父に於ける如く我とともに福音のために勤めたり。」(ピリピ2･21～22)

と言って、もの凄く褒めています。エパフロデトも褒めています。

# ●ピリピ書第１章

ピリピ書を前のところから、ほんのエッセンスだけ辿っていきます。まず第１章では、ピリピの人たちはパウロの伝道をサポートしているということ。それに対する感謝を述べている。

「 3 われ汝らをうごとに、我が神に感謝し、 4常に汝らのために、のつどつど喜びて願をなす。 5是なんじらの日より今に至るまで、福音をむることにるが故なり。

だから、私は神さまに感謝して、あなた方のことも一生懸命に祈っているんだよと。それが３節から出てきます。

6我は汝らのに善きを始め給いし者の、

神さま、あるいはキリストの御霊が、

キリスト・イエスの日まで

最後の審判の時ですね、

之をうし給うべきことを確信す。 7わが斯くも汝らを思うは当然の事なり、

その時までに完成して下さることを確信している。それは当然のことだと。

我がにある時にも、福音を弁明して之を堅うする時にも、汝らは皆われと共ににるによりて、我が心にあればなり。

そして、自分が縄目にある時も、フリーで伝道する時も、常にあなた方はみな私と一緒に恵みにあずかっているんだと。非常にピリピの人たちとの一体感というものがもの凄く表れているんです、パウロは。他の教会とは少し距離がありますよ。ところが、ピリピの教会とは一心同体だと言っている。

8我いかにキリスト・イエスの心をもて汝らを恋い慕うか、

あなた方は恋人だと。「恋い慕う」なんて言っている教会はありません、他には。ピリピの人たちに対してだけ、こうして非常に個人的な信頼、愛、そういうことを言っている。

そのをなし給う者は神なり。

しかもだからこそ、あなた方はやっぱり智慧において、祈りにおいて、高く深くなってほしい。ただ信じて喜んでいるレベルではなくて、もっともっと霊的に成長してほしいと。霊的成長を求めています。それはピリピ書もコロサイ書もエペソ書もみなそうですよ。エペソ書では、

「キリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さのいかばかりなるかを悟り」（エペソ3･18）

とやっている。クリスチャンは信じて、

「あ、これでよろしい」

なんて、そんなレベルに留まっていたらダメなんです。いよいよ今度はもうキリストの凄さに圧倒されて、

「あ、あの人はもうキリストそっくりだ。あの人が語りだしたら、御霊の生命が流れてくるわ」

と、そういうふうになるように、キリストは願っていらっしゃる。特別な人だけが伝道するのではない。皆さんそれぞれがもう伝道者なんです。道を伝える。キリストを証する。そういうことを願っていらっしゃる。だから、

9我は祈る、汝らの愛、知識ともろもろのとによりてが上にも増し加わり、10善悪をえ知り、キリストの日に至るまでよくしてくことなく、 11イエス・キリストによる義の果をして、神の栄光ととを顕さん事を。」(ピリピ1･3～11)

それから、自分は囚われているけれども、これによってもキリストが崇められる、これでいいんだよと言って、次の２０節、

「 20これは我が何事をも恥じずして、今も常のごとくかもすることなく、生くるにも、死ぬるにも、我が身によりてキリストのめられ給わんことを切に願い、また望むところにえるなり。」(ピリピ1･20)

これがパウロの願いです。「自分の欲望を満たしたい」なんてことは全然思ってない。

「我が身を通してキリストの崇められ給わんことを」

と。私はすべてのクリスチャンがそうであってほしい。まずキリストです。福音書ではキリストは、

「まず神の国と神の義を求めよ。そうすれば、すべて必要なものは添えて与えられる。あなた方の義は学者・パリサイ人に勝らなかったらダメだよ」

と、ハッキリ言っているでしょ。求めておられるレベルは凄く高い。その求めておられるレベルに合格しようと思ったら、それこそ肉の力ではダメです、生まれ変わらないと。生まれ変わって、聖霊をいただいて、聖霊の人にならないと。ヨハネの手紙を見てごらん。

「あなた方には油注がれているから、人が教えてくれる必要なんかない。御霊自身があなた方をすべての真理に導く」(ヨハネ一2･20)

とヨハネの手紙に書いてある。すべてそうやって繋がっています。それから２７節、

「 27汝等ただキリストの福音にしく日を過ごせ、

「クリスチャンらしく、神の子らしく生きろ。もう醜いアヒルの子ではないよ。あなた方は王子様だ、神の子なんだ。だから、神の子らしく生きようね」

と、こう言ってくれている。そうでしょ、キリストの福音にふさわしく生きる。だから、パウロにとっては、離れていても、またピリピの人に会うことがあるにしても、離れていても一緒にいるにしても、そんなものを乗り越えて、

さらば我が往きて汝らを見るも、離れいて汝らの事をきくも、汝らが霊を一つにして堅く立ち、心を一つにして福音の信仰のために共に戦い、 28 凡ての事において逆う者に驚かされぬを知ることを得ん。

としていてほしいと。あなた方がどんなに迫害されようが、されようが、何されようが、泰然自若としている。それが勝利だという。オタオタしない。泰然自若としている。

「神は我らのまた力なり、なやめるときのちかきなり」(詩篇46･1)

という詩篇４６篇がここにちゃんと書いてあるでしょ。それがあなた方のハッキリしただ、彼らには亡びの兆だと。

その驚かされぬは、彼らにはの、なんじらには救の兆にて、此は神より出づるなり。 29 汝等はキリストのためにに彼を信ずる事のみならず、また彼のために苦しむ事をも賜わりたればなり。」（ピリピ1･27～29）

「ええことばっかりほしい」ではない。そんなのはあかん。キリストと運命共同体だ。愛する人と一緒ならどんな苦労もいません。いい時も悪い時もどんな時にも一緒だと。

# ●ピリピ書第２章

２章にきたら、今度は兄弟姉妹の間のこと。この２章の通りやれば、集会は間違いない。多分、ピリピの教会も人数は多くなかったと思う。

「 1この故にしキリストによる、愛による、御霊の、またと慈悲とあらば、

あなた方にはこれらが充分あるんだから、

2なんじらを同じうし、愛を同じうし、心を合せ、思うことを一つにして、我がをしめよ。

そうやってくれるなら、私はうれしい。キリストも喜ばれる。

3何事にまれ、徒党また虚栄のためにすな、おのおの謙遜をもて互に人を己にれりとせよ。

「誰が一番偉いか？」なんて、キリストの弟子たちも言ってたけれども、ダメだよと。

「上に立とうと思う者は一番しんがりになりなさい。人の子が来たのも仕えるため来たんだよ」

と、そういうことをキリストは言われた。ここでも、

4おのおの己が事のみをみず、人の事をも顧みよ。 5汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。

キリスト・イエスの心を心としなさい、キリストと同じ生き方をしなさいと。

6即ち彼は神のにて居給いしが、神と等しくある事を固く保たんとは思わず、 7反って己を空しうし、の貌をとりて人の如くなれり。

本来、神だった。神と共にいた方ですよ。ヨハネ伝第１章にある。

「は神なりき。言は肉体となって、我らのうちに宿り給えり。はモーセを通してやってきたけれども、とはキリストを通してやって来た」

とありましたね。そのことをここで言っている。

己をしうし、僕の貌をとりて人の如くなれり。 8既に人のにて現れ、己をうして死に至るまで、十字架の死に至るまでい給えり。

だからこそ、神はキリストを死にっぱなしにしておかない。天の高みへ引き上げられて栄光の姿に――ご復活ですね――現れた。当然のことなんです。キリストが死にっぱなしなら、それこそ本当に「神も仏もあるものか」なんです。でも、キリストはゆえあって十字架で死なれた。我々の罪を全部背負って、死をも滅ぼして下さった。そして、仕事を、御業を果して、

「よし、これでがなった。さぁ、栄光の姿で現れなさい」

と。誰一人できないことですよ、キリストと同じあのは。キリストだからできたことで、我々罪びとが十字架にかかったって、どうしようもない。当たり前なんです、自分らは十字架につけられて当たり前なんです。強盗が言いましたね、

「我々は十字架につけられて当然だけれども、このお方は違うんだ。御国にお入りになる時には私のことを思い出して下さい」

と言ったら、キリストは、

「汝、今日、我と共にパラダイス！」

と言われた。ああいうことですね。十字架の死に至るまで従い給えり。だから神は彼を最高のところへ引き上げられる。

9この故に神は彼を高く上げて、之にの名にまさる名をいたり。 10これ天に在るもの、地に在るもの、地の下にあるもの、とくイエスの名によりて膝をめ、 11且もろもろの舌の『イエス・キリストは主なり』と言いあらわして、栄光を父なる神に帰せん為なり。」（ピリピ2･1～11）

すべてのものがキリストの前に平伏す。膝をかがめ、「イエスは主である」と言い表して、栄光を父なる神に帰する。キリストを崇めること、キリストに感謝することは即ち、キリストの背後にいらっしゃる神さまに感謝すること、神を崇めることになる。だから、キリストの背後に父なる神がいらっしゃる。

我々はキリスト抜きでいきなり

「お父さま！」

ではないんです。だから、小池先生は、

「主さま！」

と祈られる。「主さま」と祈ったら、その背後にいる神さまは

「ああ、よしよし」

と、全部通じてきているから、そういうことなんですね。一般の教会はそうではなくて、父なる神に祈って、

「キリストの御名により」

と最後にちょこっとキリストが出てくる。あれはおかしい。我々にとってはキリストさまがすべてなんです。キリストさまを崇めるということは父なる神を崇めること。キリストに感謝することは、キリストを下さった神さまに感謝すること。キリストの背後に神さまがおられて、それがもう一心同体なんです。でも、我々はキリストを通して神に至る。

「われは道なり、真理なり、生命なり、我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし」(ヨハネ14･6)

と言われた。だから、我々はどこまでも「キリストさま」なんです。キリストに祈り、キリストに従い、キリストがすべてのすべてです。「キリストにはかえられません」という聖歌〔521番〕がありますね。

やっぱり、クリスチャンはキリストです。世間は、「神さま」といったらまだ我慢する。「キリスト」といったら嫌がる。私の経験です。だから、賢い人は「キリスト」の名を出さない。「神、神」と言ってます。「神さま」と言っておけば無難なんです。「キリスト」と言ったとたんに嫌がられる。これは私の経験ですよ、皆さんはそういうことを味わいませんでしたか。味わっていなかったら、まだまだ修行が不足です（笑）。

「キリストと共に苦しむことも賜りたればなり」

「もし子たらば世嗣たらん、神の嗣子にしてキリストと共に世嗣たるなり。これはキリストとともに栄光を受けん為に、その苦難をも共に受くるに因る」 (ロマ8･17)

という。すべて自分を通して実験して下さい。ヒルティも「やってみなはれ！」と言っている。自分で全部味わいなさいと。

「天道地路」

と、小池先生は言われた。天の道に即して地路がある。「路」は足偏に「各」と書く。「道路」というのがそうだ。道は天道でしょ、路は各々の足と書いてある。だから、「道路」というのは素晴らしい言葉なんだ。天道に即して地路を歩くという。

「私は道路になりたい。私は道路です」

なんて。

「この人はおかしいな」

「いや、おかしくない。道に従って各々の足で歩いて行く。だから、道路は私のモットーです」

と、そういうことを思いますね。

# ●ピリピ書第３章

それからピリピ書第３章にきたら、

「喜べ、喜べ」

ということを言ってます。

「 2なんじら犬に心せよ、しきに心せよ、肉の割礼ある者に心せよ。

と。偽善者、偽善的クリスチャンがたくさんおります。そんなものを警戒しろと言っている。自分はかつては、

6熱心につきては教会を迫害したるもの、律法によれる義に就きては責むべき所なかりし者なり。 7されどに我が益たりし事はキリストのために損と思うに至れり。

「チャンピオンだったけれども、そんなものはかなぐり棄てて、キリストだけだ」

というのが３章の宣言です。かつては、自分にとってプラスと評価していたものが、全部今はマイナスだ。キリストを受けとる邪魔になると。

8然り、我はわが主キリスト・イエスを知ることのれたるために、凡ての物を損なりと思い、彼のために既に凡ての物を損せしが、之をの如く思う。

既にキリストを信じたことによって迫害を受け、多くのものを失った。しかし、そんなものは何とも思っていないと。

9これキリストを、かつによる己が義ならで、

律法は「己が義」を与えるんです。「自分はやりました！」と、パウロは当然自分を誇るわけです、律法を全うしたら。そしてやってない奴を審く。パウロはそれをやっていた。ところが今度は、そんな律法による己が義なんてものではないと。ただキリストを無条件にいただく。無条件にいただくのを「恵み」といいます。「報い」というのは褒美なんです。働いたことに対して報酬が払われる。

「律法を実現しました。だから、報酬として天国を下さいな」

と。これが律法の行き方でしょ。そうではなくて、もうそんなものは棄てて、

唯キリストを信ずる信仰による義、すなわち信仰に基きて神より賜わる義を保ち、

獲得する義ではない。「律法の義」は、自分で獲得する。自分を誇る。やってない奴を審く。そうじゃない。「賜る義」だという。

「私はふさわしくありません。でも、ふさわしくない人間を天国人にして下さった。ありがとうございます」

と。どこまでもりしか出てこない。小池先生はそれを「無」と仰った。

「無者にされる。十字架でゼロにされている。十字架で本当にゼロにされている人には無限無量が入ってくる。それが聖霊である」

と。だから、

「われ主と共に十字架せられたり。もはや、われ生くるにあらず、復活のキリスト、御霊のキリストがわがうちに在りて生き給うなり」

と。そういうことになるわけです。それがここでピリピ書で言っていることなんです。

信仰に基きて神より賜わる義を保ち、キリストに在るを認められ、 10キリストとそのの力とを知り、又その死にいて彼のにあずかり、 11 にもして死人の中より甦えることを得んが為なり。

だからこれは、パウロは、

「生きながらキリストと同じ姿でありたい。死んでキリストと同じ復活の姿で現れたい」

と。それくらい彼はもう、

「キリスト、キリスト、キリスト。いかにもして死人のうちより甦らんことを得んがためなり」

と。そして、「それはもう実現したよ、全うせられたり」なんて言ってない。

12われ既に取れり、既にうせられたりと言うにあらず、これをえんとて追い求む。

追求無限です。

キリストは之を得させんとて我を捉えたまえり。

キリストに捕まえられてしまっていると。

よく、私は小学校のころ、大和川という川へ連れて行かれて──褌一丁なんです──先生は、お尻の後ろの褌の閉じてある所をつかまえて、ポーンと水の中へ放り出すんです。バタバタとああやって泳ぎを覚える。ここに

「キリストは捉えたまえり」

なんてあると、我々は褌を捉えられてポーンと海に、聖霊の海へ放り込まれて、

「ああ生命だった！」

と。そんなことを連想させられる。

「キリストは之を得させんとて我を捉えたまえり」

と。キリストに捉えられていますから、キリストに捕まえられていますから、

「はい、キリストに捕まえられて、キリストは生きてます」

と。そうでしょ。

「我を食らえ、我を飲め」

と言われたでしょ、ヨハネ伝６章で。

「私を食べ、私を飲まなければ、あなた方に生命はないよ」

と言われたでしょ。あの６章で本当にくどいように、

「我は生命のパンなり。モーセはマナを与えたが、みんな死んだではないか。でも、私というパンを食べてごらん、死なないよ」

と、繰り返し繰り返し言われた。そして、

「活かすものは霊であって、肉は役立たない。私の語った言葉は霊であり生命である」

と。もうヨハネ伝は霊の次元と肉の次元とがハッキリしてますからね。

「神は霊なれば、拝する者も霊と真をもって拝すべきなり」

と。ヨハネ伝は本当に神の霊の次元と、肉の次元とのコントラストがハッキリしてます。

13兄弟よ、われは既に捉えたりと思わず、唯この一事を務む、即ち後のものを忘れ、前のものに向いて励み、

と。ところが、もう少しいきますと、

18そは我しばしば汝らに告げ、今また涙を流して告ぐる如く、キリストの十字架に敵して歩む者おおければなり。

と。この世はそうですよ、今だって。「神さま」と言ったらまだ我慢してくれるけれども、「キリスト」と言った途端にもうそっぽを向くわけです。

19彼らの終はなり。

自己責任ですから、放っておけば滅びなんです。播いた種を刈り取る。それはやっぱり、刈り取って滅びてほしくないから、我々はおだけれども、「キリスト、キリスト」と言っている。嫌がられながらも、やっているわけでしょ。

だから、嫌がられながらやっている。この世だけと接していると、嫌な思いをする。それで、聖書に帰ってきたら、

「あ、これでいいんだ、これでいいんだ」

と、そういうふうに、本当に聖書の中に戻ってきたら、

「ああ、ここが私のだった」

という気持ちにしてくれるんです。聖書を離れて伝道活動なんかやっていたら、ちょっと危ないですよ、それは。やっぱり絶えず聖書というそのに帰ってこないと、その泊まれる場所に。外へ出かけて行って、電車は車庫へ戻ってきますね、みんな。それと一緒で、出て行ったら、必ず戻って来て充電していただかないといけない。そう思います。

19彼らの終はなり。おのが腹を神となし、己が恥を光栄となし、ただ地の事のみをう。

そういうのがいっぱい居りますわ、この世のお金持ちは。大体この世でお金が儲かるというのはおかしい。正直にやっていれば、みな税金で取られてしまう。何かどこかに隠したり、ずるいことやっている。ゴーンさんはどうか知りませんよ、ゴーンとか鐘が鳴っているわ（笑）。

おのが腹を神となし、己が恥を光栄となし、ただ地の事のみをう。

こういうことをやっている実業家が多い。アメリカは割合に、儲けるけれども、

「それは神のために」

というのが何人か居る。そういう人たちは奨学金を与えて、例えばフルブライト留学生に日本人をたくさん呼んでくれている。やっぱり向こうは善玉と悪玉が両方共存してます。今はどうか知りませんよ。でも、かつては、アメリカは非常に自由で、善玉と悪玉が共存していて、我々は善玉によってずいぶん日本人の研究者は助けられたはずです。ロックフェラーだとか、カーネギーだとかいろんな大金持ちが、それを世のため人のために使ってくれるわけです。そういう大金持ちが日本には少ない。せいぜい松下幸之助とか稲森財団の稲森さんとか、何人かはいても、そういう志を持っている実業家というのは残念ながら少ない。やっぱりクリスチャンの国とそうでない日本との違いかもしれません。

20されど我らの国籍は天に在り、我らは主イエス・キリストのとして其のよりりたもうを待つ。

これは再臨のキリストを待っているわけです。

21彼は万物を己にわせ得るによりて、我らのしきのを化えて、己が栄光の体にらせ給わん。」（ピリピ3･2～21）

凄いでしょ。

「皆さんは、あなた方の本来はこれなんだ。あなたはこういうもんですよ。だから、喜べ、喜べ」

と、こうなってくる。こんなに素晴らしいことを約束してくれているんですよ。

「あなたは白鳥なんです、もう醜いアヒルの子ではないんですよ」

と。そうでしょ。

「彼は万物を己にわせ得るによりて、我らのしきのを化えて、己が栄光の体にらせて下さる」

そういう希望を与えて下さる。

# ●ピリピ書第４章

ピリピ書４章に行くと、

「 1この故に……主にありてく立て。

と。４節に、

4汝ら常に主にありて喜べ、我また言う、なんじら喜べ。

喜ばないでいられましょうか、という感じですね。

5凡ての人に汝らの寛容を知らしめよ、主は近し。

身近にいて下さる。聖霊となってキリストは身近にいて下さる。

6何事をも思い煩うな、

だから、何事も思い煩う必要はないよと。マタイ伝でも、

「汝ら思い煩うな。まず神の国とその義とを求めよ。そうすれば、必要なものはすべて添えて与えられる」（マタイ6･33）

とありますね。ここにもちゃんと、

何事をも思い煩うな、ただ事ごとに祈をなし、をなし、感謝して汝らのを神に告げよ。

感謝してあなた方の求めるところを神さまに、キリストに語り告げなさい。そうしたら、

7さらば凡て人のにすぐる神の平安は、

人がくれる平安というのは一時的です。神の平安は揺るがない。

汝らの心ととをキリスト・イエスによりて守らん。8 に言わん、兄弟よ、そなること、凡そ尊ぶべきこと、凡そ正しきこと、凡そよきこと、凡そ愛すべきこと、凡そあること、如何なる徳いかなるにても、汝等これをえ。

これが大事なんです。へたするとクリスチャンは他宗排撃をする。

「私たちだけが正しくて、他はダメだ」

というのが多いけれども、およそ真理ならばこれを受け入れる、あるいは評価する。ダメなものはもちろんダメですけれども。真理にかなうものならば受けいれる。そういう広やかさ、これは小池先生はお持ちでした。非常に仏教の方にもが深かった。ああいうのには私は本当に感動しました。

宣教師の狭い世界でしていた私を解き放ってくれたのが小池辰雄先生で、１９５９年でした。僕は５６年にクリスチャンになって、その時は宣教師の導きの中にあったものですから、どうしても狭い。ところが、５９年にエマオ会主催でキリスト講演会を京都大学でやった〔演題「無的実存」1959/11/9楽友会館にて〕。そしたら、こんな素晴らしい自由自在な、こんな世界があったんだと思って、本当に感動しました。１５０人くらい、いろんな人が来てました。普通の何かお茶を売っているおばさんが、

「今日はいい話を聞いた！」

とか言って顔を輝かせておられたのを見ました。

あれが私と小池先生の出会いの一番感動的な場面だった。その前の晩はやっぱり小さな集まりをやって下さった。その時は、まだそれほど私はピンとこなかったけれども、講演会で一般大衆を前にして話された時に、本当に凄いなと思った。それが１９５９年でした。

だから、このパウロが、

「狭い了見ではダメだよ、およそ素晴らしいものがあったらめなさい」

と。よく小池先生は、のことを『芸術のたましい』で書いておられるでしょ。

「私は自分の作品に責任を持たん。板画は板画をひとりで書いている。板画のためには、私は鬼にも蛇にも神にもなれる。自分は自分の仕事に責任を持たん」

〔註：「……板画がひとりでに板画をなして行く、板画の方からひとりでに作品になって行くというのでしょうか。……板画が板画を生んでいる、そういうありさまを、わたくしは非常に大事だと思うのです。わたくしは、自分で板画をやっていますから、板画のことになると、鬼にもなり、蛇にもなり、仏にもなり、神にもなってもらいたいのです。わたしの板画にそういうものを表現してもらいたいのです。自分でするのではなく、してもらいたいのです。ですから、わたくしがした仕事ではなく、板画がした仕事になってもらいたいのです。……」（『芸術のたましい』／芸術のたましい／棟方志功より）〕

と言っている。小池先生はそれを非常に高く評価されました。小さな自分から出てくるものは大したことはない。それを超えた何ものかに導かれてやっている仕事でないと本ものではない。それが「上からの力」による仕事ですね。先生は、

「自分の詩というものは全部そういう力に委ねてやっているんだ」

ということを言われたわけです。そういうことがここにちゃんと書いてある。

それから更にいきますと、

11われによりて之を言うにあらず、我は如何なるに居るとも、足ることを学びたればなり。

「」

という言葉が何か京都のお寺にあるんですね。〔註：京都の龍安寺にこの文字が掘られたつくばいがある〕

12我はにおる道を知り、富におる道を知る。また飽くことにも、飢うることにも、富むことにも、しき事にも、一切の秘訣を得たり。

もう自由自在だと。

13我を強くし給う者によりて、凡ての事をなし得るなり。」（ピリピ4･1～13）

と言っている。

こんなふうに、ピリピ書というのは非常に私たちに身近なんです。ですから、ピリピ書を通してパウロが願っていてくれることは、即ちキリストが今も私たちに願っていて下さることだと、そういう思いがします。こういう角度から福音書の言葉を読むと、

「そうだ、そうだ。ピリピ書でここに言われているのは、福音書ではここで言われている」

と、そういうふうに全部つながってくるんですよ。それから、キリストは詩篇を愛読しておられた。だから、詩篇の願いは全部キリストが成就しておられる。

「詩篇であなたは嘆いていたね、その嘆きは私が引きとった。そして、あなたの嘆きを喜びに変えるよ」

と、そういうふうにキリストは、詩篇の祈り、嘆き、苦しみ、それを全部引きとって、答えを与えておられる。私はそう思います。だから、私の文語の聖書は不思議に『新約聖書 詩篇付き』となっている。あれはやっぱり素晴らしいなと思いました。どういう意図でやったか知りませんけれども。ルターは、

「詩篇は小さな聖書である」

と言う。詩篇にはいろんなものが入り込んでいる。歴史も入ってますし、救いのこと、祈りのこと、嘆きのことが入っている。その詩篇の祈り、嘆きを全部キリストは引きとって福音として語っていらっしゃる。そんな感じですね。

# ●聖書と一つになって欲しい

まぁしゃべりだしたら、切りがないから、これで終わりますけれども。とにかく、お願いしたいことは、聖書と一つになって欲しい。

「聖書は私が言いたいことを全部書いてくれている。聖書から学ぶのではない。私は聖書です。私は自分でうまいこと言えないけれども、聖書に全部書いてある。聖書は私のことを代弁してくれている。だから、私を知ろうと思ったら、聖書を読んで下さい」

「どこに書いてあるの？」

「あんた、読んでないね！」

なんて（笑）。皆さん、本当にそうなってほしいんです、一年かかって。今、正月に願いを立てて、クリスマスになって、

「はい、三ほどできました。その続きはまた来年に」

と。それでも結構ですよ。人生百年時代でしょ、まだまだ先がありますね、皆さんは。私はあと１４年くらいしかないんです、１００歳まで。でも、まぁ皆さんはもうちょっとありますからね、その間に本当に──

「聖書は私のことを証している。旧約聖書は私のことを語っている」

と、キリストは言われた──今度は、

「新約聖書は私のことを語っている。私が如何なる者かということは新約聖書に全部書いてある。私を知りたければ、本当に聖書を読んで下さい」

と。そのぐらいに、皆さん、胸を張って告白していく。パウロは、

「われ福音を恥とせず」

と、言いましたよ。

「16我は福音を恥とせず、この福音はユダヤ人を始めギリシヤ人にも、凡て信ずる者に救を得さする神の力たればなり。」（ロマ1･16）

と。福音を恥とするクリスチャンはたくさんおりますよ。仲間の中ではしゃべるけれども、人の前ではキリストを告白しない。ダメなんです。私は、

「就職したら、自己紹介する時にまず、自分はキリストを告白しなさい」

と言う。その時に告白しておいたら、いろいろザワメキがあっても、あと楽だよと。それでなかったら、

「いつ告白しようか、いつ告白しようか」

と、絶えず苦しい。私の経験からしてもそうです。だから、まず自己紹介の時に

「私はこういうものです。育ちはこういうところで育って、どこどこの大学で勉強して、こういう会社から来ました。でも、それは私の外側であって、内なる私はキリストによって生まれた人間です」

と、ハッキリ胸を張って言う。やはりそれくらいの自己紹介をやってほしいなと思う。皆さんはもう、そういう機会はないかな。でも、そのぐらいは、みな若い人にも伝えて、

「この世なんて大したことはない。神の国はこの世に切りこんできている。キリストは向こうからこっちに来ている。今も来ている。私はそれを告白している」

と。それが本当に、聖書を読んでいるということなんです。キリストと一つになっていく。キリストが応援して下さる。では、この辺で終わります。